

---

# 時雨

榎本自転車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時雨

### 【Nコード】

N6897U

### 【作者名】

榎本自転車

### 【あらすじ】

天津国——「黄泉」と呼ばれる世界。

この国にくらす一組の夫婦、華羅と壺与は、かつて自分たちが生きた時代を雨に重ねて思いめぐらす。

この作品は「沖鈴花」名義で自身のブログへ投稿したものの重複投稿です。

（シリーズとして投稿するに当たって、手を加えています）

今は少し、昔語りをしましょう。

月のない、さみしい夜だから

しとしと、降りしきる時雨しぐれに耳を傾けながら

今はただ、君と語り合いましょう。

「ずいぶん続くわね」

黄泉の国にも冬が訪れた。

この日は朝から、冷たい雨が降り続いていた。

重い夜の空を見上げる壺いよ与の目は、憂鬱というよりどこか楽しげに輝いている。小桂こつちぎの袖をおさえ腕を伸ばすと、冷たい雨つぶをその手のひらにすくう。雨つぶは壺与の手のひらの上に落ちては一つになり、小さな水たまりをつくった。

「壺与、中へ入りなさい。君まで風邪をひいてしまうよ」

白の単姿ひとえの華羅からは、今はほとんどの遣戸やじとを閉めた広廂ひろむしから、庭へ面した簀子縁すのこえんに立つ彼女へ穏やかに声をかけ、手招きをした。

熱のせいで腫れた瞼の華羅は、昨夜よりも顔色は良いとはいえ、まだどこか青白い。いつもならきりりと結い上げている髪は、今ではばらばらと崩れかけていた。

少年のような姿をしている彼は、黄泉の国で特別治安部の頭を務めている。

「濡れていないかい」

「ええ、平気よ。……ここは冷えるわ。さ、中に入って」

御簾みすを持ち上げると、華羅を先に入れ、続いて自らも内へ入った。火鉢には炭が十分にくべられており、燭台しよくだいの灯りは室内をやさしく照らしている。

華羅は高麗端こうらいぺりの畳に敷かれた夜具の上に胡座あぐらをかき、壺与はその

傍らの円座に腰を落ち着けた。

「気分はどう」

「うん、昼間よりもいいよ」

やんわりと微笑み、壱与は華羅の額へ手を当てた。その指先は、時雨のせいでひんやりと冷たい。

「まだ熱いわね……もうちよつと横になっていたほうがいいわ。それとも何か食べられそうかしら」

「……少し、起きていたいんだ。熱にうかされて、何だか眠るのが怖いんだよ」

いつもは強気な華羅は、はにかむような顔で弱弱しく言うと目を伏せた。

「華羅がそんなに弱気だなんて、珍しいわね……さ、横になって。わたしが側にいるから、だいじょうぶ」

愛おしむような声。

壱与は静かに目を細めた。

「……オレ、こどもみたいだな」

苦笑しつつ横になる。

「病気になる、誰でもそうなるものよ。心も弱ってしまうのね」  
ふたりは小さく笑い合った。灯りの火も笑うようにゆらめいた。  
ふと格子の向こうへ目を向けると、華羅は雨の音に耳を傾ける。

「雨の音は、きれいだな……壱与は昔から雨が好きだったね。広廂に座って、ずっと空を見上げていた。彩夜あやの生まれた晩も雨が降っていて、外が見たいという君を抱えて一緒に夜空を仰いだのを覚えているよ……あの日は雨だというのに、美しい夜だった」

「ええ、きれいな夜だったわね。春雨が薔薇そらびへ柔らかに降り注いで、若葉を温かくゆらしていた……まるで精一杯生きなさい、と励ますかのようなだった——彩夜も激励されているんだって、きつと強く優しい子に育ってくれるのだと感じて、とてもうれしかったわ」

遠い日々の幸せが、ふたりの間に広がっては、再び静かに消えた。  
「雨だれは、いろいろな記憶を思い出させるの。いい思い出ばかり

じゃないわ。悲しいこともたくさん……——華羅が亡くなった日も、冷たい雨が降っていた。わたしが天津國へ初めて足を踏み入れた時も、大雨が降っていたわね……ひどい雷だったわ」

微笑の中にどこか悲しい色を湛えた壺与の眸が、華羅の眼を捉えた。

「——オレたちが出逢った日は、桜の雨が降っていたね。壺与が桜の精のようだった……本当に、美しかった……」

最後はその光景を目の前に見ているように、華羅はささやくようにうつとりとつぶやいた。

「ふふ……あの華羅の驚いたような顔が、桜の花びらの影にかくれたり、あらわれたりする様子が、まるで昨日のことのように鮮明に覚えているわ。あの時も華羅は、わたしに“桜の精か”と訊いたのよ。覚えているかしら」

「ああ、覚えているさ」

燭台の油が、ジジッと鳴いた。

灯りが揺れ、ふたりの影もそれに合わせてゆらゆらと揺らめいた。「そろそろ、眠れそう」

壺与の問いに、華羅は小さくうなずいた。

「だいぶ落ち着いてきたよ……ねえ、抱き締めていいかい」

華羅は静かに尋ねると、体を起こした。

壺与は答える代わりに、小さく微笑む。華羅も微笑み返すと、そつと壺与の肩を抱き寄せた。

華羅の腕は熱のせいか弱弱しく、熱かった。

大切な人が、早く元気をとり戻しますように、と祈りを込めて、壺与も華羅の背中を抱き締めた。

しばらく静寂と、軒を打つ雨だれの音が、時を流れた。

「……ありがとう。もう、大丈夫」

そつと腕を解く。

雨はまだ、暗い地面へ落ちてはさわさわと歌っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6897u/>

---

時雨

2011年11月16日12時37分発行